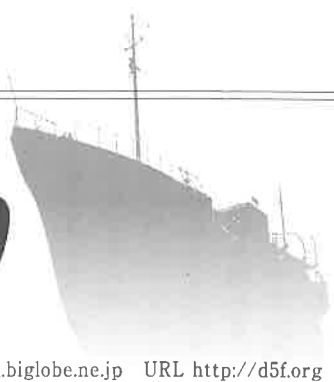


2014.11.01  
No.384  
(11・12月号)

# 福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



## 福竜丸の被ばく60年から

### 新たな出航へ

ビキニ水爆実験・第五福竜丸被ばく60年の記念事業は、一〇月二六日の記念コンサートで大きなイベントは終盤に入りました。

記念事業は、三月一日「記念のつどい」の開催に始まり、『第五福竜丸は航海中』の出版、連続市民講座を開催し、展示館での企画展を実施してきました。

市民講座では、核開発の激化と被ばく被害、環境汚染、経済的影響、日米関係など幅広い分野の講師から示唆に富む報告が続きました。そこから核実験、核兵器を拒否する市民の声の役割が改めて導き出され、これは今につながるポイントであると同時に、ビキニ事件を今日的な問題意識で伝えとらえる重要性が感じられました。

来たる一二月には、核兵器の人的影響に関する国際会議が、オーストリアのウィーンで開催されます。今回は第二次大戦後の核実験被害につい

て取り上げられるとのこと。非核国のイニシアチブによる動きが、核保有国を包み込むような市民世論へと広がることが期待されます。

一九八〇年代には、核戦争後の地球について「核の冬」などが大きく取り上げられ、研究者の考察、WHOなども大規模な核兵器の使用による被害を救出することは困難との分析を明らかにしました。

いま、核兵器使用の敷居が低くなる状況も危惧されます。被爆七〇年へ向け原爆がもたらす惨禍に目を向け、第五福竜丸・ビキニ事件による世界的な反核の市民世論、科学者など専門家の行動などを想起しながら、来年へとつながっていきたいと思います。

\*上の写真はアート企画「フクリユウマル展」オープニングイベントでの黒田さんと参加者（2面記事）。「新しい出航のコンサート」は、一月号に掲載します。

なお来年1月〜3月には、「ゴジラ」アート企画がおこなわれます。

## イベント

## 黒田さんと描こう

## 「いま感じたこと」

現在、第五福竜丸展示館では秋の特別展として、「ビキニ水爆実験60年特別企画 黒田征太郎『フクリュウマル』展」を開催中です（一二月一〇日まで）。そのオープニングとして、一〇月一二日に黒田征太郎さんを展示館に迎え、参加者と絵を描くイベントを行いました。

当日は、小学生や美術部員の中学生、赤ちゃんを連れた家族連れ、年配の方がたなど三〇人が、黒田さんと一緒に絵を描こうと集まりました。

黒田さんは、ベン・シャーンの『水爆はやめよ！』のポスターを見て、自身のタッチでベン・シャーンのポスターを描きました。そしてそれを見せながら「ベン・シャーンの横でベン・シャーンのことを喋れることがすごく嬉しい」と語り始めました。

ベン・シャーンの線  
ベン・シャーンはユダヤ系

アメリカ人です。僕がこの人の絵を見て感動したのは二〇代の頃、五〇年近く前のことです。その頃はアメリカがまだ非常に元気な頃で、僕はレイモンド・ロイというデザイナーの『口紅から機関車まで』という本をむさぼるように読んでアメリカの全てに憧れていました。その憧れのなかにいた画家がベン・シャーン。彼が描く線や色の配置にすごく僕は憧れたんです。

僕は人のことを羨ましいと思ったことはありません。僕は僕がいいと思っただけです。生



きてこられたのは、出会ってきた人たちのお陰です。もし生まれ変われるとしても、僕に生まれ変わりたい。そして同じことをやってみたい。ゴールはないと思っています。ヤッター！と思うことなくバイバイするんじゃないかと思うんですけど、それでいいやと思っています。

ここにいる人たち、男の人も女の人も若い人も老いたおじいさんもすごい奇跡があったて生まれてきたんです。生まれてくるのができなかつた命もたくさんあるわけだからね。だからその人なりにもらってきた命は大事にしたほうが面白いと思います。

でもせっかく生まれてきたのに、自分や親の意思に反して命が途中で断ち切れちゃうことがあります。それは悲しいことだと思っんです。その舞台になった船がここにあって、丸木さんが描かれた広島・長崎もそう。人間はずごく良いこともするけど、わけのわからんうちに命を奪ってしまうこともある。

例えば自分が不思議な力で生かされているのだとして、



その力に黒田そろそろ終わりだよって言われたら僕はおとなしく引き下がろうと思いません。でもそうじゃなくて途中で引きちぎられるように終わるのは嫌だな。ヒステリックにごちゃごちゃするよりも、今が大事なんだということの方に持つていったほうがいいんじゃないか。もちろん、右手を上げて戦争反対って叫ぶことも大事だと思いますが、僕にはできません。今が大事なんです。だから今日はみなさんで今を描きましょうよ。

みんなで描く、いま

話し終えると黒田さん参加者に目の前にある画用紙にいま感じたことを描くよう促しました。誰もがどのように描き始めてよいか困惑している

ようでした。そこで黒田さん、画用紙を回収しクレヨンで形を一つ、思いつくままに形を描きました。

それを配ると初めはどうしていいかわからずいた参加者も、黒田さんの描いた線に乗せて手が動き出しました。ひととおり描き終えると、それを集めて床に並べ貼りあわせました。

その上に、絵と絵をつなぐように線を塗り、子ども達にもよびかけて絵と絵をつなぎました。

最後に黒田さんは、無計画といえば無計画なんだけど、こういうものなんだよ。僕は絵や音楽は自分の気持ちにストリートにやるべきであって、上手いとか下手とかではないと思っっています。僕は初めて出会ったみなさんとこの絵を作りました。きょうのことを覚えておいてね。皆さんの「今」がこの絵の中に残っています。僕もそれに参加させていいただきました、とニコヤカに語りかけました。

\*黒田征太郎さんの絵四〇〇点の展示は、一二月一〇日まで観賞することが出来ます。

トークイベント

ジョンさんと小宮さんの  
歩みを語る

八月一六日から九月末ま

で、特別展「被ばくの島マーシャル・ジョン・アンジャインと小宮茂雄の交友録」が開催されました。ピキニ水爆実験当時ロンゲラップの村長だったジョン・アンジャインさ



島田さん(左)と澤田さん(右)

んと、戦前ロンゲラップの氣象観測所で観測員をしていた小宮茂雄さん、二人の交流を通じて戦争と核の時代を考えるものです。

九月一〇日には四〇年にわたりマーシャルの取材を行ってきたフォトジャーナリストの島田興生さんと、小宮さんの半生を数年間かけて聞き取り取材してきた元毎日新聞編集委員の澤田猛さんによるトークイベントが開かれました。

被ばくの島の村長

ジョン・アンジャインさんは被ばくから五〇年後の二〇〇四年に八一歳で亡くなりました。八人の子どものうち四人が甲状腺障害を持ち、三男を亡くすなど水爆による様々な苦しみを背負いながら一六年間ロンゲラップの村長を務めました。

小宮茂雄さんは二〇一二年に九〇歳で亡くなりました。小宮さんは一九三九年に旧制中学校を卒業し、米国を假想敵国としていた海軍水路部に入りました。対米開戦に向けて氣象データを取るため、

展示解説をする島田興生さん



一三か所の氣象観測所が設けられ、小宮さんは七月にロンゲラップの観測所に赴任し、一年半をそこで暮らしました。その間、炊事や雑用などをする日本語を話せる要員としてジョンさんが雇われ、二人の交友が始まりました。

戦争に翻弄されて

小宮さんは一九四二年一月に帰国した後、陸軍の下級将校の養成を受け、諜報活動などを行うハルビンの特務機関で働きます。敗戦そしてソ連による「シベリア抑留」としてカザフ共和国やウズベク共和国などで一年間の強制労働に従事させられました。

小宮さんからジョンさんへ、  
56年ぶりの手紙(部分)

「私は小宮茂雄です。ロンゲラップの観測所にいました。あなたと別れてからもう56年たちました。お元気ですか？私は元気です。(略) ピキニ水爆実験でロンゲラップが酷い目にあつたのを知っています。レコジさんが死んだこと、たいへん悲しいことですね。一日も早くロンゲラップに帰ることができるよう祈っています。(略) ロンゲラップのみんなによく伝えてください。ボートが流されたとき、あなたが助けに来てくれたことを思い出しました。ありがとう。」

\*ボートで沖に流された小宮さんたちを、海岸で見つめたジョンさんが泳いで助けに来てくれたというエピソード。これを非常に恩義に感じていた小宮さんは生前繰り返し語っていたそうです。

一方、一九五四年のピキニ水爆実験当時一歳だったジョンさんの三男レコジは、被ばく後、甲状腺障害を発症しアメリカで手術を受けます。そして一九歳の時に白血病になり、亡くなりました。五七年にアメリカの安全宣言を信じロンゲラップに帰島していた島民たちにとって、この若者が核によって命を奪われるという出来事は決定的な記憶となり、八五年に子ども達の未来のために、島を捨て脱出することに繋がりました。

ジョンさんはロンゲラップの八六人の被ばく者のなかでも特に悲劇的な過去を背負いながらも、被ばく住民のために生き続けました。日本を三度訪れ、島の人びとの苦しみを訴えました。一九九六年一〇月、小宮さんはテレビでジョンさんの来日を知り、様々な手づるをもちいて島田さんに辿り着きジョンさんへ手紙を送りました。後日、ジョンさんから返事が届き、文通が始まりました。一九九七年八月、小宮さんは、島田さんがとりくむメジャトにすむロンゲラップの住民に中古の小型ディーゼル船を贈る「ぶんぶんプロジェクト」に同行してマジユロへ渡りました。実に五七年ぶりに二人は再会を果たしたのです。

久保山忌（9月23日）

## 祈りをこめ人々つどう

## 28回目を迎えた原水協の学習のつどい

## 川崎代表理事が講演

東京原水協は、「第五福竜丸のつどい」をスポーツ文化館で開催し、第五福竜丸平和協会の川崎昭一郎代表理事が講演しました。

「ビキニ事件六〇年、第五福竜丸展示館の歴史」と題し、一九六八年の第五福竜丸の保存運動の始まり、ビキニデー集会での地元江東区代表からの報告や、武藤宏一さんによる「沈めてよいか第五福竜丸」の投書など保存がよびかけられ、ひろげられる経緯を振り



返りました。

地元江東区の有志、教員や区職員労組、女性団体、大工さんの組合などの関わり、埋め立てられたゴミの中に放置された第五福竜丸の清掃や修繕、船内の水の汲み出しなど、さまざまに取り組みを具体的に紹介しました。

東京原水協は、保存運動の当初から都内各地での募金や署名に取り組みました。開館後は、9月23日久保山忌の見学と学習の会をつづけ、その後の「第五福竜丸エンジンを夢の島へ都民運動」や「お花見平和の集い」でも積極的な役割を果たされてきました。展示館の社会教育施設としての活動を支え協力された東京原水協に感謝を述べるとともに、これからのさらなる活動への期待を込めて講演を閉じました。

## 34回久保山忌句会開かる

## 句会「船員賞」作品と60年募集句を特別展示

久保山忌句会は、福竜丸被

ばく六〇年と故久保山愛吉無

線長の生誕百年に募集した記念俳句とこれまで「船員賞」（最高点句）獲得の作品九〇点を館内に展示しました（9

月13日～10月6日）。句会では、荒井孚さんの句が第五福竜丸「船員賞」を受賞しました（句後掲）。荒井さんには、随想「バラの遺言碑」を寄稿いただきました。

## 被曝資料六十年に点く秋燈 荒井孚

## バラの遺言碑

昨年の久保山忌句会。いつものように最高点句は第五福竜丸船員賞。昨年は特別の副賞もついた。「愛吉・すずのバラ」の苗である。ところが、二位だった私がバラを譲り受ける経過になった。

高さ二〇センチ足らず、まだまだ細く、茎に近い感じの幹は頼りなげで、一、二年育てなければ花は望めまいと思った。とりあえず家でビニールポットから鉢に植え替え

た。ばらを咲かせるのは難しい

と、のんびり構えていたら、なんと、花芽がついている。大急ぎで殺虫剤散布。そして五月末に最初の花が咲くと、次々に十輪は咲いたろうか。

玄関の一鉢のバラの

遺言碑 孚

「愛吉・すずのバラ」の品種はクイーンエリザベス。第五福竜丸平和協会安田和也事務局長の説明によれば、育てやすい品種とのこと。なるほど、強健種といわれるだけのことではあつて、神経を使わな

というイメージが、以前の私にはあつた。日照、肥料、消毒、水やり、剪定等々、考えただけでも厄介だ。ところが五年前のことだったか、通信販売で購入した一輪のばらが、その春に見事開花したのである。手入れはさほどでなく、楽に香りの高い花が誕生した。次の年に一本追加し、現在は二本、勢いは失せたが咲き続けている。この経験が生きた。

「愛吉・すずのバラ」は、こともなく冬を越し、春を迎えてぐんと成長した。来年は咲くくらいにはなるだろう

この一〇月開催された「古沢太穂全集」刊行記念レセプションでは、歌曲「愛吉・すずのバラ」の独唱があつた。初めて聴く曲だったが、夫妻の思いを伝えようとする作詞者、作曲者、伴奏者、歌手の情熱が感じられた。

バラもそろそろ葉が散り始めるころとなつた。やがて冬。剪定の時期を迎える。（あらいまこと／新俳句人連盟）

## 60年目の久保山忌に 手紙を読む

今年も久保山愛吉さんの命日には船の下で「平和を語る第五福竜丸のつどい」が開かれました。紙芝居や歌、ガムラン演奏、語りなどさまざまな演目が並びました。展示館ボランティアの会の出演も一〇回目となりました。

最初の出演は、ビキニ被災五〇年の節目に、久保山愛吉さんと家族に寄せられた手紙の特別展示を行っており、そのオープニングを兼ねて手紙を朗読しました。結成されて間もないボランティアの会の皆さんと、三〇〇〇通の手紙を整理し、一通一通感想を言い合いながら読み込み、思いを共有して紹介したので、ぜひ声に出して紹介したいね、ということになったのでし



た。会のメンバーのお孫さんにも参加してもらい、つどいの常連出演者・中島和子さんに音楽をお願いするという、今振り返るとずいぶんと盛りだくさんの演出をしました。

おかげで好評をはいくし、台本を使って別のグループが朗読会を開くなどの反響もありました。以来、展示館に寄せられた子どもたちの感想文、原爆ドームと第五福竜丸の保存にまつわる言葉、写真絵本『マーシャルの子どもたち』の朗読、ロンゲラップの人々の証言など企画展とリンクしながら、オリジナル台本で回

を重ねていきました。ボランティアの会のメンバーも入れ替わりながら、出演してくださる方も増え、直前まで台本がなくても「どんとこい」と、読んでくださる頼もしい皆さんです。きつと大丈夫！と私もメンバーを信頼して、今年も練習なしのぶっつけ本番でした。

米原子力委員長の言葉、日本の外務大臣の言葉、乗組員の治療にあたる医師たちの言葉、久保山愛吉さんの隣のベッドで久保山さんの苦悩を目撃した大石又七さんの手記、久保山さんから子どもたちへの手紙、そして死去後の病理解剖所見を、お見舞いや励ましの手紙の合間に盛り込み、緊張感のある朗読となりました。

久保山さんは水爆実験に遭遇し、被ばくして亡くなりました。たくさんの人たちが心配し、悲しみ、憤り手紙をしたためました。手書きの文字から浮き上がるその思い、時代の匂いを手がかりに、来年も仲間たちといっしょに朗読をつくりあげたいと思います。(市田真理)

## BOOK REVIEW

今秋、核兵器をめぐる「私たち」の過去と未来を考える良書が相次いで出版された。

川崎哲『核兵器を禁止する』(岩波ブックレット)は、ピースポートや核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)で筆者が取り組んできたNGO活動、ロビー活動に裏打ちされた「核兵器禁止条約」に向けて必要とされる到達目標とプロセスを提言する。地雷禁止のオタワ条約やクラスター爆弾禁止条約のように、核兵器を禁止する国際法の構築は実現可能だ、と論旨は明快だ(6面参照)。

「核密約」をめぐる一連の報道でも名高い太田昌克共同通信編集委員の『日米〈核〉同盟』(岩波新書)は、雑誌

「世界」に掲載された論文と筆者が執筆した配信記事を中心に編まれた論考集。日米の核密約による同盟と安全神話は「核ならし」というマインドコントロールに呪縛であるとし、平和利用の名のもとに日本国内世論を操作し、軍事利用・核配備を受け入れる素地を作っていた経緯を日米双方の公文書と関係者インタビューからあぶりだす力作である。未だ断ち切れぬ核燃サイクルを縛られつづける一方、3・11後も余剰プルトニウムを溜め込むしかないこの国をみつめる、国際社会の冷やかな視線も指摘する。

二冊に共通するのは、核兵器に対する日本政府の二重人格性だ。核保有国にとつてすら核兵器は「時代遅れ」という認識が現実にあるなか、広島・長崎・ビキニの被ばくを経験した日本が主導的な役割を担わずしてどうする!との指摘だ。核兵器の非人道性の議論は新しい国際規範になるうとしている。いま核のない世界の実現はリアリティをもつ。(M)

連続市民講座 第4回  
いま水爆の時代を問う  
～核と向き合い明日へ～

四月から開催してきた市民講座「いま水爆の時代を問う」核と向き合い明日へ」は九月六日が最終回となり、九一人が参加しました。連続四回の講座では特別証言を含め一四人の報告者と各分野の専門家三人がコーディネーターとして発言。学生ボランティアなど二〇人以上がスタッフとして参加しました。

ビキニ事件と科学者

第四回は「核兵器と科学者、市民、被ばく者」がテーマで核実験をめぐる科学者、知識人の系譜と市民運動の歴史、核なき世界にむけて活動するNGOからその展望が紹介されました。

小沼通二世界平和アピール

七人委員会事務局長・慶応大学名誉教授は、自身の交友も紹介しながら、西脇安（大阪市立大学助教授・当時、ウィーン大学名誉教授）や英物理学者ロートブラットの動きにより水爆の構造が解明されたこと、日本の科学者による第五福竜丸の「死の灰」の分析が裏打ちしたこと、これが水爆の危険性を世界に広く知らしめ、人類存続の危機という認識から「ラッセルリアインシュタイン宣言」につながっていくこと、宣言に参加した湯川秀樹とパグウォッシュ会



ビキニ事件と科学者について話す小沼通二さん

議、世界平和アピール七人委員会との関わりなどが紹介されました。

朝永振一郎さんが「核兵器の問題は、政治家や外交官だけでなく、物理学者にも考える責任がある」と語ったのを間近で聞いたという小沼さんは、第二回のパグウォッシュ会議で物理学者二〇名と共に、核実験の無条件停止、核兵器開発への不参加、小国の犠牲の元での大国の安全の否定、原子力を公開で、放射線障害や核実験探知についての国際協力を求める意見書を提出しました。

核実験と欧米市民・知識人

小沼報告と呼応する形で、科学者と同様に欧米の知識人や市民が「グローバルフォーラムアウト」（世界中に拡散した核実験による放射性降下物）を契機に大きく変化していった経緯を、樋口敏広・京都大学白眉センター特定助教が紹介しました。バリー・コモナーAAS委員（アメリカ科学振興協会。「サイエンス」発行団体）が科学情報を求める市民と協働し、子ども



の健康を憂慮する母親たちによる反核運動・市民科学運動を盛り上げていったこと、市民の調査結果が核戦争の危機を警告したことなども紹介されました。政府から独立した科学者と市民が連携した測定や調査は、核開発の歯止めとして機能し、核実験禁止条約交渉にも一定の抑止効果があったとの指摘です。

核兵器のない世界への胎動

川崎哲ピースポット共同代

表・核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）国際運営委員は、こうした歴史的背景をふまえ、市民運動・NGO主導の核兵器禁止条約への動きを提唱しました。現在国際的な核兵器の「非人道性」の認識とは、広島・長崎における原爆被害の実相だけではなく「こんにち使用されたら」という危機意識に基づくもので、グローバルフォーラムアウトにより15億人が餓死するという「核の飢饉」を想定したものと指摘します。核による攻撃のみならず偶発的な発射や事故のリスクをも考えれば、核兵器そのものを禁止するしかない。少しずつしか動くことのできない政府間レベルよりも、NGO活動がダイナミックに事を動かせることは、対人地雷やクラスター爆弾の禁止条約などでも実証されています。

川崎さんは最後に、今年一二月にウィーンで行われる第三回「非人道性会議」（オーストリア政府主催）にあわせて開かれる市民社会フォーラムにも注目するよう呼びかけました。



「ビキニ環礁で行われた米国の水爆実験によって日本のマグロ漁船第五福竜丸の船員

連載⑦

晴れた日に  
雨の日に

山村茂雄

「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」は第五福竜丸平和協会初代会長三宅泰雄さんの言葉ですが、あわせて三宅さんは、科学者の視点から福竜丸事件が「わが国の放射能研究の原点であったこと」「わが国科学界の潜在的な力をひらく世界に示す動機になったこと」を指摘しています。その「潜在的な力」の一翼に、三宅さんの気象研究所があり、猿橋勝子さんが研究に携わっていました。

が「死の灰」と呼ばれる放射性物質を浴びる事件がおこりました。この死の灰についての解明が気象研究所に持ち込まれたとき、三宅先生は「これこそ私たちが取り組まなければならぬ問題だ」とただちに研究を始められました。ビキニの灰が黒潮に乗って日本近海にたどり着くという三宅先生の発表を米国の研究者は信じようとはしませんでした。私は一九六二年に渡米しカリフォルニア大学スクリップス海洋研究所で日米共同研究に約一年間従事しました。その結果、日本の測定法はすぐれて高い精度の研究結果が確認されたのです。二〇〇二年七月二〇日と日付のある「科学する心」と題する猿橋さんの文章の抜粋です。

当時の研究報告の一つ、三宅泰雄「日本に降った人口放射能雨(54・5〜7)(日本学術会議放射線影響調査特別委員会報告No.1, 54・8)が『ビキニ水爆被災資料集』に収録されています。

猿橋勝子さんは一九四一年創立された帝国女子理学専門

学校(現東邦大学理学部)の一期生。先に引用した「科学する心」には、猿橋さんがその生涯を通じ学問、研究の師と仰ぐ三宅泰雄さんとの邂逅をこう記しています。

「戦争中に創設された学校で設備が不十分だったため、夏休みなどに学生は他の大学や研究室等に実習生として送り込まれました。私は三宅泰雄先生の研究室に派遣されました。実習生はピーカーを洗うなど雑用をさせられるのが常でしたが、三宅先生は「ポロニウム」の物理化学的研究」というテーマをくださいました。ポロニウムといえば科学の勉強を始めた女子学生にとってあこがれの人であるポランド出身の化学者マリー・キュリーが発見した放射性元素です(失われた祖国ポランドにちなんで名付けた)。当時私は放射性物質についての知識はほとんどありませんでしたが、うれしくてたまらず帰りに神田の書店に寄り放射能に関する本を買ったのを覚えていました。

猿橋さんの経歴には、女性

の名を冠した会の創立、初の日本学術会議会員選出(八一年)など「女性として初」の仕事が多くあります。その一つが「猿橋賞」の創設です。気象研究所退官の一九八〇年、先輩・同僚からの祝い金を基金に「女性科学者に明るい未来をの会」創立。そして翌八一年から毎年、五〇歳未満のすぐれた女性科学者一名に猿橋賞を贈呈することとしたのです。五〇歳未満としたのは「定年までを考慮した」ととされています。この猿橋賞の創設も「実は恩師である三宅泰雄先生の発案によるもの」であったと猿橋さんは語っていています。

「三宅先生と何度もゴミの山を分け入るように夢の島へ通ったことを思い出します」

第五福竜丸展示館に出かけてくる三宅さんの側には、いつもそれが当然であるかのように猿橋さんの姿がありました。各種行事に闘病をおして参加する三宅さんを支えるように猿橋さんが同行していました。それは、かけがえのない師への敬愛の姿として、私

の記憶にきわだっています。猿橋さんは、第五福竜丸保存委員会の委員、平和協会発足当初の評議員、後に理事を務められました。亡くなられたのは二〇〇七年九月二十九日、八七歳でした。各メディアが訃報を伝え追悼記事を書きました。「核実験を止めさせた女性科学者」「フオールアウト時代のジャンヌダルク化学者」など、NHKのクロースアップ現代は猿橋賞受賞者へのインタビューを介して「女性科学者の闘い―猿橋勝子の遺したもの―」を放送し、その生涯を讃えました。

同年一〇月二一日、一ツ橋の学士会館で「女性科学者に明るい未来をの会」による「猿橋勝子先生を偲ぶ会」がもたれました。猿橋賞受賞者など多くの参加者があり、皇后の供花もありました。遺族代表として挨拶した甥の猿橋則之さんは現在、平和協会評議員に就かれています。

(注)文中引用の「科学する心」は、偲ぶ会にて配られたパンフレットに略歴・業績紹介とともに掲載されていたものです。上の写真は一九七五年秋、猿橋、三宅さん。

## 新資料、関係省庁より入手

9月19日、厚生労働省によりビキニ事件に関する文書304点約1900ページが開示されました。これは太平洋核被災支援センター（高知県）の山下正寿さんらが請求したもので、第五福竜丸を含む多くの漁船の被ばくについての貴重な資料です。開示文書の中には、1991年に公開された外務省外交文書等ですすでに公開されている指定港（塩釜、東京、三崎、清水、焼津）での検査（1954年3月～6月）一覧、原爆症調査研究協議会に関するもの、科学調査船俊鷗丸に関するものなども含まれていました。また55年以降、人体への放射線許容量の考え方について研究が進められていく過程を示す資料、放射能汚染魚廃棄のための決裁文書など初公開もあります。

この資料開示を受け国会議員が厚労委員会、農水委員会で質問し、水産庁でも資料調査が始められています。

2013年11月に外務省が開示した文書中、厚生省（当時）が外務省に提供した資料が含まれていましたが、多くが「墨塗り」状態での公開。漁船・商船の乗組員の健康被害に関する箇所、当事者にも伝えられていないと思われる。指定5港（のちに指定外13港でも）では第五福竜丸の被災が発覚した後、入港する漁船の漁獲物のほか船や船員の体も測定しており、測定方法や廃棄対象となる汚染値は厚生省が決定し通達していました。

これらの資料開示は、多くのメディアで取り上げられ、NNNドキュメント（日本テレビ系列）『放射線をあびたX年後3』でも紹介されました。

## 東工大で科学者・西脇安展

第五福竜丸の被ばく・ビキニ事件と深く関わり、大きな役割を果たした西脇安博士（東工大名誉教授）をたど

る企画展が、東京工業大学博物館で開催されました（10月11日～31日）。

「核時代を生きた科学者 西脇安」と題した展示は、1、西脇博士とビキニ事件 2、ビキニ事件をヨーロッパに伝える 3、原子力と西脇安、から構成されていました。

西脇博士は、第五福竜丸の被ばくが報じられた3月16日に大阪中央市場に入荷した第五福竜丸のマグロの検査を市から依頼され、強い放射線が検出されたことに驚き、妻ジェーンさんを伴い、夜行列車で焼津に向かい福竜丸の船体を測定。その晩、米原子力委員長あてに乗組員の治療の為に爆発で生成された核種を知らせて欲しい、との手紙を出しています。

「死の灰」の分析は東京大学、静岡大学、京都大学などとともに大阪市立大学でも進められ、博士はこの化学分析にも関わり、その結果を携えて7月から11月までヨーロッパを訪れ、10カ国でビキニ事件の実態を報告しました。8月末にはベルギーでの放射線生物学国際会議でJ・ロートブラット博士に会い、これがブラボー水爆の解明につながりました（6面）。

西脇博士は、日本政府による年末のマグロ検査打ち切りに際しては、「学問的基準が明らかにされていない」と疑義をとねえる質問状を提出しています。1959年にはアメリカに招かれ、原水爆の脅威についての講演活動をおこなってこられます。

その後、東京工業大学教授、1968年からはウィーンの国際原子力機関（IAEA）に派遣され、ウィーン大学で教鞭をとりました。博士は、原水爆には反対をとねえながら、原子力エネルギーについては安全に運用する技術の確立を考えていました。晩年は生地の大阪で暮らし、2011年3月27日に亡くなりました。

第五福竜丸展示館には、被ばく50



年にあたる2004年2月と12月に来館され、事件当時の思い出を語られました。今回の企画展では、当館所蔵の、「死の灰」「第五福竜丸のマグロのうろこ」「ガイガーカウンター」「大石又七氏製作の船体模型」などが展示されました。

## 西脇博士のご家族来館

10月31日、西脇安博士のご子息・安文・紀子夫妻（セントルイス在）と博士の長女アリスさんが展示館を訪れ、熱心に見学されました。一行は、東工大で開かれた西脇安展に合わせて来日されたもので、安田和也学芸員の案内で第五福竜丸の被ばくをたどり、とくにマーシャルの核被害や米兵士の被ばくについて関心を示していました（上写真）。

安文さんは、「ここは大変良いミュージアムであり建物も美しい。展示は写真と説明が事実即して並べられよくわかる。福竜丸の話は母ジェーンから聞いている。訪問できてとてもよかった」と話されました。

## 2015 ゴジラアート企画

「大きいゴジラ小さいゴジラ」のアート作品を制作する長沢秀之・武蔵野美術大学教授と学生たちの作品展

\*期間 1月24日—3月22日